



恭  
奉  
年  
名  
上

リ 5  
6029  
1



U5  
6029  
1

泰平年袋凡例

東照宮



家康公御治世三年御壽七十五自  
天文十一年至元和二年迄

台徳公

秀忠公御治世十九年御壽五十四自  
天正七年至寛永九年迄

大猷公

家光公御治世廿九年御壽四十八自  
慶長九年至慶安四年迄

嚴有公

家綱公御治世三十年御壽四十自  
寛永十八年至延宝八年迄

昭和十八年  
六月廿日  
小田島  
長男  
氏有贈

常憲公

綱吉公御治世三十年御壽六十四自  
正保三年至宝永二年迄

文昭公

家宣公御治世四年御壽五十一自  
寬文二年至正德二年迄

有章公

家繼公御治世四年御壽八自  
宝永六年至正德六年迄

有德公

吉宗公御治世三十年御壽六十八自  
貞享元年至寬延四年迄

惇信公

家重公御治世十七年御壽五十一自  
正德元年至宝曆十一年迄

浚明公

家治公御治世廿七年御壽五十自  
元文二年至天明六年迄

大御所公

家齊公御治世五十二年御壽萬萬歲  
自安永二年至天保八年御辭職迄



泰平年表目録

次善不同本文  
出所原也今不改

市年譜劇業記、列祖成績、逸史國史、江亭記、太田家譜、豊  
臣家譜、元寬日記、慶長年中記、當代年祿、道春年譜、  
羅山文集、退私録稿、丙申記行、野槿、常住院記、大德院  
記、補名寺由緒書、足利學校由緒書、圓光寺由緒書、惺  
窩行狀、山州名跡志、駿河記、公郡補任、梵舞日記、家忠  
日記、衆妙集、睦子又談、琉球史略、本朝神社考、光記  
土音抄、曾我家譜、鈴木家譜、島津家記、細川家譜  
榊原家記、吉田家譜、中井家譜、御本日記、金地院日記  
國師日記、元和年祿、續年祿、東武實録、嚴政録  
光廣卿日光記行、紀州年祿、松葉記事、宝貨事略  
日光山日記、同御縁記、寬永江戶圍、御制法、君臣言行  
録、大猷公治世畧記、乘室家勘文、寬永行幸記、三雲成賢  
家譜、長崎日記、諸家本寺帳、寬永御示諭日記、孔子  
堂日記、春齋畧記、弘文院家記、我峯譜略、國史日記

鳳岡年譜、鳳岡全集、正保日記、正保事録、以貴小傳、北  
條系譜、山王日記、會津世稿、土津靈神言行録、見  
補山廟記、視聽日録、坂上池院日記、寬明日記、御當  
家合奈、仰景録、慶寬要録、萬岡石見日記、徳山家  
記、春山家記、三雲家記、永井尚庸家記、万天日記  
貞録日記、吉良日記、宝徳日記、越前守光長家記  
憲廟寶録、貞享諸家書、延宝江戶切繪圖、昔々  
物語、湯原日記、常山文義公行實、遺夫物語、水野勝長  
家譜、細井廣澤家帳、幸若家記、榊澤吉保家記、仕  
官格義兵、續紹運録、蕃山寶録、大島義近家譜、新  
令句解、享保録、同續編、同通鑑、同遺事、同  
成典、水府家記、加州家記、庶物類笈、宦中秘策  
文露叢玉露叢、菽生家譜、本下寅亮家譜、股部  
保廣家譜、室直清家譜、下田日記、伊勢貞丈日記  
小笠原持廣家記、憲法部類、白石遺文、折焚柴





の軍書四十八冊阿波九郎正勝等よりして書寫せらる

**永祿**六年の秋家康と法政**永祿**七年三州東西争ひ屬屯

**永祿**八年二月督自始昌生在母持為氏天正十一年七月廿九日條氏直室

**永祿**九年十二月廿二日文祿三年再後池田家相輝政慶長

**永祿**十年正月十日凌因別鳥取慶寺寺達

**元龜**元年正月遠良濱松城小治移徙或云是道世良田と云

**天正**二年正月九日正五位下二月

五日從五位上同日侍從或云是道世良田と云

八日秀康郷生於義九君二河守在母永見氏秀吉公養子稱羽柴

**天正**五年十二月十日從四位下同廿九日右近衛權女將

七年四月七日竹子代君生秀忠公稱也

二月五日從四位上同年九月忠吉生在母西御氏松平下野守と云

遊益性高院及寺稱増上寺成列當廣慶院同年十月十日山夢想之

遊連被推てまの櫻同年月日振振君生在母穴山氏文祿四年二

正清院及寺稱金戒光明寺後藤及廣島達正清院

**天正**十年三州孫力一系河嶺と成合三遠と

信吉君生萬千代君稱武田氏は母穴山氏慶長七年十月常陸國水城

西國河守屬屯**天正**十二年二月廿七日免名議從三位

同年四月十九日小牧山内陣**天正**十二年十月四日

權中納言同年十月九日正三位同年十二月四日彌齋

堀子河移徙**天正**十四年九月十四日豊臣秀吉在公妹

朝日姫君在母穴山氏同日豊臣秀吉在公妹

同日豊臣秀吉在公妹

同日豊臣秀吉在公妹

同日豊臣秀吉在公妹

同日豊臣秀吉在公妹

同日豊臣秀吉在公妹

同日豊臣秀吉在公妹

同日豊臣秀吉在公妹

同日豊臣秀吉在公妹

同日豊臣秀吉在公妹

同日豊臣秀吉在公妹

同日豊臣秀吉在公妹

同日豊臣秀吉在公妹

同日豊臣秀吉在公妹

同日豊臣秀吉在公妹

同日豊臣秀吉在公妹

同日豊臣秀吉在公妹

同日豊臣秀吉在公妹

同日豊臣秀吉在公妹

同日豊臣秀吉在公妹



○日、義之先が慶長が昔平へ出る所の所、○復日待の昔、  
樂亭田島松の和歌としてその所を指し **天正** 十六年四月  
十日の所、○義之先の限りあり、○日、○長、○光り、○を、○そ、○く、○す、  
大和より 義之先の所 **天正** 十七年正月朔日、○銘、○二月、○強  
寺、○二、○玉、○古、○地、○震、○二、○月、○秀、○吉、○公、○流、○城、○築、○五、○月、○秀、○忠、○公、○山、○母、○堂、○西  
那、○局、○迦、○去、○西、○解、○彈、○正、○在、○赤、○門、○清、○負、○吉、○女、○室、○勝、○平、○太、○史、○傳、○章、○女、○謚  
就、○泉、○院、○及、○強、○音、○中、○就、○泉、○寺、○宣、○長、○五、○年、○七、○月、○贈、○從、○一位、○政、○謚、○室、○臺  
院、○及、○寺、○号、○宣、○臺、○院 **天正** 十八年正月十四日、○山、○臺、○別、○強、○河  
河、○前、○義、○吉、○自、○二、○月、○至、○七、○月、○小、○田、○原、○征、○伐、○是、○長、○劉、○白、○と、○強、○寺、○二  
甲、○信、○五、○國、○を、○結、○一、○伴、○互、○お、○掩、○我、○飛、○上、○地、○下、○強、○上、○院、○二、○ヶ、○玉、○并、○を  
江、○玉、○の、○田、○五、○石、○を、○山、○在、○流、○の、○湯、○身、○石、○就、○泉、○地、○花、○四、○日、○市、○場  
白、○陶、○が、○美、○步、○所、○中、○泉、○清、○且、○古、○お、○の、○一、○ヶ、○石、○湯、○田、○山、○子、○石、○を、○持、○強  
の、○地、○と、○せ、○し、○流、○金、○儲、○書、○二、○冊、○八、○割、○と、○し、○し、  
江戶城 江、○戸、○場、○小、○山、○移、○從、○  
○は、○そ、○の、○山、○場、○の、○り、○い、○古、○田、○家、○院、○中、○古、○田、○の、○り、○古、○資、○長、○初、○持

資、○入、○道、○一、○て、○道、○進、○と、○早、○と、○康、○正、○二、○年、○義、○政、○の、○本、○お、○り、○武、○藏、○五  
才、○以、○取、○江、○戸、○の、○地、○を、○築、○く、○す、○村、○を、○子、○代、○田、○室、○田、○村、○田、○と、○し、  
長、○保、○元、○年、○四、○月、○八、○日、○江、○戸、○城、○經、○官、○如、○主、○地、○の、○形、○場、○中、○地、○お  
り、○て、○石、○を、○流、○て、○垣、○と、○一、○壘、○の、○高、○十、○餘、○丈、○を、○片、○を、○元、○之、○之、  
の、○り、○指、○指、○間、○海、○並、○泉、○流、○を、○せ、○り、○流、○を、○以、○流、○門、○沙、○流、○五、○ヶ、○り、○門  
毎、○小、○古、○木、○を、○以、○石、○橋、○を、○是、○城、○門、○を、○入、○を、○い、○石、○燈、○臺、○在、○古、○木、○連、○り、○て  
中、○地、○の、○各、○を、○い、○主、○長、○劉、○を、○靜、○務、○院、○と、○し、○し、○文、○政、○八、○年、○お、○り、○て  
京、○師、○南、○禪、○者、○村、○庵、○相、○五、○ヶ、○り、○橋、○川、○の、○社、○徒、○靜、○務、○院、○の、○寺、○院、○を、○原  
訪、○一、○幅、○を、○送、○る、○義、○庵、○を、○板、○手、○村、○庵、○跡、○を、○古、○流、○具、○長、○先、○を、○板、○か、○り、○て  
南、○の、○欄、○間、○小、○堀、○九、○月、○海、○倉、○の、○僧、○得、○名、○仁、○亭、○記、○を、○作、○り、○奥、○國、○中  
堂、○東、○勤、○止、○皆、○訪、○を、○旅、○り、○て、○館、○を、○り、○主、○側、○小、○樓、○閣、○廬、○の、○札、○を、○お、○く  
刺、○を、○並、○西、○を、○合、○多、○所、○と、○り、○二、○尺、○の、○糸、○窓、○開、○き、○く、○當、○土、○の、○古、○根  
を、○お、○り、○東、○の、○眼、○下、○小、○茅、○海、○を、○見、○り、○て、○泊、○船、○亭、○と、○云、○路、○百、○橋、○の  
梅、○を、○栽、○て、○小、○亭、○と、○建、○炭、○屋、○下、○小、○西、○湖、○の、○梅、○を、○栽、○し、○梅、○香、○月、○亭、○と、○し、  
城、○中、○五、○ヶ、○り、○井、○を、○鑿、○し、○主、○水、○早、○舞、○と、○し、○と、○も、○洞、○を、○し、○り、○お、○り、○

予備あり毎朝麾下の士數千人を集めて弓矢試む寛正  
年中後花園陽平の武利地執事ありと學孫を召し  
ひきこみ 高倉おらうと云ふやうに立のそとより  
已ら居ぬ松をうつりし海をふりての言根を  
年あきと云ふと云ふは馬場田川原の事と云ふ  
の事と云ふは一ふりて云ふの事やと云ふ  
七月廿六日道灌を主扇若の上杉定正が居る  
定より上杉の持城とあるは道灌の男と云ふ  
政を恨み山内の上杉弘定が居る 一は男と云ふ  
左馬太史氏綱少属 一は承四年正月氏綱扇若の上杉朝景  
の江戸城を去りて是を論じ家康を山内弘定に  
して江戸の城を占りし事なり 天正十八年  
山内は戸城を領せり 〇是年山内藤本の執事を  
分るる平定親が伊豆政村多忠勝榊原康政石川

康道是也 〇一系乃伏見の交代也 慶應元年伏見あり  
天正十九年正月於江戸城初め關八州の騎士拜禱 一年の初  
也 文禄元年改元 〇此山田氏辰子代君  
上総外領地也 將孝長十一年四月從四位下十五  
國高田城元和二年七月十日 天和三年七月三日  
院及兼信公被訪貞松院 文禄元年三月肥前  
出陣是太閤朝鮮征伐に依りて也 〇是年以城  
六組の宛地とせらるる也 文禄二年 〇是年  
肅宗の史書に思えし 〇此あり 文禄二年  
架り居るをよむはの古橋と云ふ 〇二月廿九日  
吉野花見の時之首の和歌を詠みし  
花の初らひはけりぬる花地を香をあらわして  
まをぬ地也 〇花のあひさめぬ 〇此あり  
之を地と云ふは 〇此あり 〇此あり 〇此あり

此の巻をより後より書きしりやまきき際のとすべ  
神のまの地 ちりく地花のこまりのよす地山くらやま  
しんじまの厚神地 花のいをひ 月夕代ま子とを  
の地より一地山切子安りい限りありしり

道春の豊臣譜の文禄三年二月秀吉が登城を見去野花  
也端秀の権寄存の自和願九首

大権現利家政宗と縁准之后道澄法下全宗法眼銀  
巴ホ又有詠奇とまひ人のあ々皆存一冊を是二月廿

九日の事と善日回縁和寄とて内寄とのせり又細川  
出陣良の集に 神君の代りまをるより一めて二をまを

花の海うい 志くひきて初ういしちめ我判證さるり  
まきし花の山海ふ 花のいのをひ 十古神心こころる

文禄三年二月三月山一法登山北為在るに院右徳院  
此新作を記也雙合文七言諫一首呈利学校之要執筆

察之元信  
什物徒秀  
次越治

以扇面(お徳大徳院住持宥雅法下内作の末)又公海を二

要後し内作の和顔をせよ 峯介百位 峯念胎金抄安 峯中  
塵者 三佛峯々司北巡南神因元峯止攸若龜鬼共宮 則直之出扇

十二月禮記正義を清原秀賢子信貞が 月日松千  
代君生 松山田氏 他長次秀平及秀長四年正月十音逝 文禄四年

仙子代君生 七日逝 水氏平岩主牛頭親吉齋子孝長七年二月 松姫君  
生 内太田氏 孝長二年 日 年 七月 呈利学校の信の如の聖

像 宗 宗 殿 之 經 注 疏 上 松 女 房 也 同 曩 小 元 信 之 書 取  
て豊后関白の徒いしを再学校(還)納ら風○春う日光

記のし子校の予を記して六慎小又談云関白秀次及自東時  
亦 奉 照 大 神 君 之 而 患 之 既 而 秀 次 背 秀 吉 以 入 寺 所 山 自 殺 於 是 元

信又特伝 神君侵城氏与月秋秀元什物以是所不謂の四幅  
聖像及女經法流在其中予今所従観之身像是奇(持降祐清  
虫也云)と見也 慶長元年正月五日 八日三位内大臣陸

七月十二日大地震京都伏見迄巨宅并民屋破倒一屋瓦の  
 者甚多一 **慶長** 三年四月内務省より成石清水八幡子比  
 系治あり八月十八日刑部白太政大臣一位豊后守吉公  
 伏見城におりて薨去城三法東阿弥院の葬十月朝  
 鮮の諸将が朝伏見不到意 神君の禍也 **慶長** 四年  
 四月伏見城の内長城秀物を補佐一天下兵馬の糧を取  
 給へり **慶長** 五年六月唐津代征伐出備あり七月  
 下野田小山陣陣四年九月美濃國関ヶ原陣逆使  
 伏誅法皇一統の為也四月廿日京都所司代を重る  
 勇年より作中信昌北條氏より板倉四郎丸為備重光  
 二代の四月廿七日古坂城より西九、入神公孫僧徒  
 神宮悉くおかし **十月十八日** 義直公生〇五郎大君徳川幕門  
 督尾張大納言内母志水氏孝長八年三月甲斐玉を賜四十二年  
 八月廿九日身尾張國寛永三年八月十九日従二位大納言孝安  
 三年五月七日逝益教公号建中寺及奔尾及右古屋建中寺

尾  
家  
祖

所  
司  
代

**異國** 〇は年河津院信尼利並人泉及堺浦小舟泊して初て通商  
 通商 中〇は後唐山を南文趾古城遷り程呂宋西洋東浦の諸國より來  
 船して平戸長崎を外の浦くまで通商を孝長十六年の頃明及び  
 南垂吳城長崎小舟八十餘艘と云又由是年船と稱し亦玉よ  
 リて外國の海海一高を通せしう唐山河津院の外を寛  
 永よりて止らぬ **慶長** 五年永井右衛門太夫直勝を以て細川  
 玄首の執禮儀式あり予部下問せらぬ玄首より教を  
 及知の書に精を並信し賜ふ同年九月関ヶ原下らる  
 らるるとして之は國をささせあひあふ不珍本意次を菜  
 邑加前郎則定村の柿を裁を成幾をて比句ありし故  
 如多忠務内親を身し是月関ヶ原陣陣事小難之出  
 陣年の出陣より一之言評者信院、編り同時是利孝  
 校之要供事白紙赤丸の内、由りし孝少子孝の一字を書  
 せらるし一抄物を賜ふ同年十月 忠前少將之友  
 系肅を以て漢書乃十七史詳説を讀せらぬ同年

異  
國

學校

十月 中前小旗之安國古没収の書寫を元長老  
三要小旗の史記之「下」抄之 是名曾我尚佑、公方家の  
法式を下向きて故実を採録せらるる曾我家譜小又  
方是尚佑家長之筆の冬公方家抄法式を同せらるる故実  
亦不用せらるる（きり）号は戸知り新仕（きり）号作せらるると有  
慶長 六年四月幸且松原野を松平忠政小旗り流民岩村  
松平家系小旗り是は譜代の家士封國の始なり三月三日  
右様より伏見城（中）後同年九月伏見小學校を設  
けらるる先師當家學校の始なり日土月五日伏見小戸  
小旗師同九日川越中野新宮寺より 亦厚志也  
有故奉に違あり同日十二月二日江出山門小三子石豊  
國明神（一万石内寄附）高代奉録之尚毎月十八日神事  
を奉じて是を祀るなり元和元年六月十八日費五社大  
協の志守小旗り元和子乃乃死と依傳守上久松と元和依此立  
至大菩薩の始なり之と佛小旗りて此中由出傳して

慶長  
金銀

公家元門記元和の事知る者存在は未詳と云々 拙者も子豊長  
右記より七月八月十八日伏見城の始なり此院出筆小  
孫との權下社を建てて是を古の神と号す也今この社廢し大  
仙殿の傍に堂あり法号國泰院殿灵山我々儀と彫り  
○林下裡の料の地所小屋一を彼地の地不集移す也  
今其年より依傳五石田屋令根を以て  
創業記の七年に依 是より後大判小判を令判丁銀を板  
伊豆玉の金を以て 強判判に判と云藍紙の右を以て  
おの制の改 學を長令根と云  
六日 逆一位 同月十九日 上洛 伏見 着席 同年 二月 鎌倉  
高島八幡宮 盛宣 同年 三月 七日 伏見 子龍之 賴宣 今生 口長福居  
徳川 隆勝 依傳 大納言 此 本 氏 元和 二年 七月 十九日 封 紀伊 國 寛永  
三年 八月 十九日 位 二位 権 大納言 寛文 七年 五月 廿三日 致 仕 十二年 正月 十日 逝  
諡 南 飛 院 及 葬 紀 及 濱 中 長 保 寺 為 七 年 五月 朔 日 所 為 内  
先 月 廿 二 季 の 事 此 書 清 同 年 六月 十日 中 島 上 邸 外 正  
紙 此 書 南 於 東 大 寺 の 秘 府 を 用 之 葉 卷 侍 並 卷

紀元  
家祖

伏見三年番

せらる勅使の勅使も大に光重廣橋右中并細光  
榊原女兵衛光成なり。○改暦の時代は將軍家の例もまうせ業  
奉侍を截らると云創業記の所詮は月のよりか之止らるるといふ  
今も是の法なり。慶長七年六月、江戸富士見地亭に比  
文庫御建らしむ。金沢文庫の本を他の品書も收儲  
せらる。是の江戸品書物花の中書物も之なり。始也。同日  
十月二日江戸品書物花の中書物も之なり。始也。同日  
法。上り。伏見、同年十二月、馬場一組、後大出、初之  
伏見城の裏を勤む。是を伏見の番と云。年録も是也。  
先慶長五年、并系、初後成、一葉、梅倉、伊勢、中、日下、致、吾、志、  
東洋、清、志、乃、作、小、園、て、伏見、城、の、通、り、辰、吉、氏、を、勤、て、後  
松平、隱、決、ち、主、務、城、代、と、次、同、十二年、二月、十九日、大、出、番  
改、浪、山、山、崎、志、成、各、一、隊、の、士、を、尋、之、伏見、城、を、書  
る、と、云。○慶長三年江戸品書物花の中書物も之なり。始也。同日  
二座を移さる。是書庫建。○當代年録も六月十四日、出書物

出徒の始

と云。并、出、重、宝、の、古、平、海、濱、を、出、書、一、旦、利、字、校、主、松、和、尚、出、文、庫  
系、出、書、物、の、目、録、を、云、く、久、正、年、の、出、書、物、も、多、分、の、系、九、代、の、時、分  
金、沢、(袖、平、久、正、年、の、出、書、物、も、多、分、の、系、九、代、の、時、分  
必、出、書、物、の、目、録、を、云、く、久、正、年、の、出、書、物、も、多、分、の、系、九、代、の、時、分  
子、十、枚、并、願、○慶長八年正月、初、之、走、り、虎、の、出、書、物、も、多、分、の、系、九、代、の、時、分  
福、小、松、平、右、多、助、原、之、水、松、平、志、摩、也、三、井、左、門、右、走、り、虎  
の、出、書、物、も、多、分、の、系、九、代、の、時、分、必、出、書、物、の、目、録、を、云、く、久、正、年、の、出、書、物、も、多、分、の、系、九、代、の、時、分  
此、嘉、永、門、邊、五、郎、内、府、様、御、存、心、依、て、之、南、出、徒、の、娘、あり  
又、元、和、の、以、い、歩、卒、虎、と、云、寛、永、永、の、娘、あり、は、徒、出、書、物、も、多、分、の、系、九、代、の、時、分  
交、り、て、出、せ、り、は、徒、虎、五、郎、依、二、口、あり、一、口、寛、永、永、九年、八月、廿  
五日、二十、儀、三、口、の、格、七、依、五、口、と、云、云、慶長八年二月、十二日、伏  
見、城、小、松、平、右、多、助、將軍、宣、下、征、夷、大、將、軍、淳、和、特、許、学、院、別  
當、源、氏、長、者、年、事、を、許、さ、る、隨、身、兵、杖、を、賜、ふ、○  
當代年録も、寛、永、八年、二月、内、府、公、頼、朝、氏、の、例、も、之、將  
軍、補、任、可、出、由、之、等、而、信、養、虎、也、御、出、書、物、も、多、分、の、系、九、代、の、時、分



徳川九代将軍水戸中納言出女太田氏十四年十二月廿日  
身常陸水戸城寛永三年八月十九日従三位権納言  
四年四月七日正三位寛文元年七月廿九日逝益成公葬  
陽明山並牌于常福寺○同年九月東大寺へ宝物  
の長持三十二箇易附せら風石（中略）是年  
世上の講書を評さ因爲十月十日右大臣を以  
辞（善通の云云）是月江戸墨師同爲江及  
依和山城を同玉老根山移さる（慶長）九年四月  
十日且利学校を松貞親政要點中を致す同月廿九日  
松前の旗二ヶ条松前志摩守（松前）二月東海東山山陸  
道の取吏小令一して一里塚を築せら因爲三月朔日江  
戸法皇駕を別駕海出入湯因廿九日伏見（总帥）因  
年六月廿日右田神龍院梵音院を致す同月  
廿八日廿二日象因同八月十四日江戸墨師○今年の内  
七流法云 台廟と次列祖成蹟とありあり創業記に渡り

神祖と次今始是の従ふ（慶長）十年四月廿九日伏見  
因爲三月末禮を間諒せらる（兼記）同四月七日  
征夷大將軍を以辭同十六日 台廟將軍宣下あり  
也より 大帥御様と稱し（兼記）同四月廿九日  
政板せらる爲二条の院之儒者林又三郎信房を  
右出さる三條下河の徳吉あり○右春う徳植并年譜小  
云せるもとも自讃するたの（兼記）弱冠の頃 大和の  
この内大臣おてましくけるう二条の内おて孫福（兼記）  
先長老信長老清原権満おとも（兼記）光武の首向  
祖より當代をさしけるうと學作ける名是元りささけ  
まはぬは光武の御孫ありと作事あり 光武の御孫ありと  
海濱の御記あり元徳の御孫ありと又及魂香のまはぬは  
有やとまはぬは光武の御孫ありとありと及魂  
香のまはぬは光武の御孫ありと及魂香のまはぬは  
孝史人の樂府と東坡詩話の武帝の禁て孝史人の



魂を奉はんと記し侍るとし又屈系り堂の何を云と作ら  
せしし朱文公が註の沢蒙ありと尸屯 大相國左太を  
かりにありて年若きものより元元たりなると感し作  
て年若長己年己けり **慶長**十年九月十日伏見所祭  
駕江戸へ還中 **慶長**十年三月朔日江戸城は改築  
**江戸城** 池田輝政福島正則波野幸長の若清正黒田長政おふ原七  
らき築城を堂高席縄張○是月十五日は登駕馬場上座  
古日強府小 着中築城の地は管見今年の事  
禁裡 仙洞杖渡朝議の地を難きふ事主地を増え  
東小名一所余四石垣を築る同日四月七日伏見城小  
入所亦八日佐藤因同七月七書を改修せらる同日九月  
亦首江戸城成同日諸津家久琉球王心七人等を  
らふ同日十月四日江戸へ還中 **慶長**十二年四月元日  
市姫君生○此世太田氏拜嫁松平陸奥守忠宗十五年壬二月  
十日遊益一照院及葬 強兵府中 善陽院○同日江戸

城也 台廟(古儀)諸大名小原せらるる強府城を築  
しめり各郭内不陸士の宛地を編み因年二月十五日  
細川忠政教不慈して室町家式三巻を書して其家  
○細川家譜小治政元年十二月亦井右を太史並勝を以室町家  
柳營の諸家おふ事し學らるる小十三有二月十五日室町家  
式二巻をおして其家とらんを編み亦井家譜小治政長  
六年並勝を以て細川家書小陸礼多分おの事を書し  
らんと書きより其書を編み其書を編み其書を編み  
並勝小治政ふとる五巻と十三巻とを編み其書を編み  
同日三月廿八日強府城小治政之天海信正林道春と法禪  
六月より義智朝鮮の二使を携り轉強府を同奉七月  
三日強府城小治政同日十月四日祭祭十四日江戸  
西丸入中同日十二月十三日強府へ還中同日十二日  
強府城上是為侍医壽全院宗巴玉海徳因を  
勤事道春長治と治之と草綱目を強府 **慶長**

十二年三月十日書法成内移徙是年林五表を  
孫府(此名海智)を作り宛地を賜はる四書六経の  
武經七書を講し日根顧問書庫を司志の(家)一  
成績の云皇朝衣將好學神祖志く(古)一(欽)帝之文祿  
二年惺高を江戸に(大)字乃(貞)親政要撰せし  
めら(慶)長十二年八月比叡山の制法七ヶ条(定)あり  
同月東寺親智院を令して経戒の法を(創)作せし  
言(孫)山(喜)慶寺(小)納の(ら)原(是)寺(古)前(東)撫(を)細川  
幽(孫)平(綱)小(因)土(月)河(越)新(庄)小(編)一(小)同(寺)  
孫(河)小(龍)之(道)長(を)一(て)常(小)論(祿)三(思)長(を)讀(ぶ)の(事)  
且(内)文(庫)の(卷)編(を)掌(ら)し(む)慶(長)十四年三月尾  
浪(清)源(小)入(市)華(也)を(監)一(せ)し(二)月(鴻)津(家)之  
琉(球)國(を)征(せ)し(七)月(琉)球(中)山(王)尚(寧)之(薩)摩(小)來  
る(薩)長(の)使(と)府(驛)小(至)り(琉)球(王)を(以)て(許)賜(せ)ん  
る(を)一(小)市(許)家(有)り(琉)球(王)を(家)久(小)賜(ふ)平(章)

紅毛  
金船

を授らる八月南蠻小阿當陀人貢物を孫府小御  
書を(琉)國王(小)賜(ふ)と(母)年(肥)前(平)戸(小)高(弘)交(易)を  
[き]方(を)令(せ)ら(る)原(阿)當(陀)人(の)入(貢)先(を)り(始)る(十)二(月)  
清(津)家(之)使(を)孫(府)に(戸)小(致)し(て)琉(球)王(を)賜(は)る  
こと(を)許(す)孫(喜)之(長)を(物)宣(令)小(賜)り(水)戸(を)孫(府)  
小(賜)ふ[慶]長十五年二月池田輝政福島(正)則(加)茂  
清(正)黒(田)長(政)小(の)請(將)小(原)一(て)尾(別)清(原)の(城)を(左)  
長(尾)小(移)し(秋)小(城)築(を)築(之)義(並)小(賜)ふ(同)  
二月勅使孫府小奉(て)以(存)讓(位)の(事)を(告)ぐ(八)月  
高(島)津(家)久(琉)球(の)中(山)王(を)携(り)孫(府)小(到)り(孫)賜(せ)  
一(し)心(是)琉(球)十(小)納(の)城(有)り(同)年(九)月(群)書(要)  
一(流)一(初)謙(倉)の(傳)故(小)命(一)總(持)院(小)就(之)騰(書)世(一)  
め(り)原(是)寺(侍)医(古)田(玄)安(父)宗(胸)之(遺)物(杜)氏(之)典(寄)  
効(良)法(を)孫(府)に(同)年(十)月(廿)日(江)戸(一)入(市)同(廿)音  
孫(府)一(還)伊(一)慶(長)十六年正月廿一日大政大臣并

琉球  
船始

兼桐の由致を錫ふの意ありといふも亦辯退  
を乞ふは評定を以て同市公法先祖新田大助助義  
系朝臣小治守府將軍法文廣忠公小大納言を  
錫らる同市公法尾原右左衛門守屋城守を錫らる  
夫より事小由上治廿二日清系内同月廿七日後陽成院  
讓位ありたり  
日廿八日豊后右府秀頼左衛門入治二系守平一登  
嘗 中野景行同月廿八日藤原一還市八月  
亦自身火物を被りあふ同月九月十六日吉田神  
龍院林井原系原系國と號し同十九日道春を  
一して建武式目を讀しめし得史を論し終ふ  
○是年四月十六日京師に於て三系の本系目を出させ天下の  
牧伯に監書を掛しむる年一系小如右大將軍を後代に公  
方の法式にて事作しと我ら公是貞永式目の文小批し如  
之を兼建武式目小如公延長式并小群出沈要貞觀政要續日  
本紀の執事小由講究を乞二十年由法令頒布せらる

為の張本を思ふ一 同廿日南蠻世界景屏風法繪  
あり異域小の由河法小あり ○是年五月の日記に之  
以て先より善厚異域の本頁に善長六年小あり善博善吉守  
同七年小太泥五十年小置置古城田浮同十四年小阿蒙陀同十七  
年小 亞馬港新伊西把沙西同十八年小漢入利西亦の由書を兼  
りおを推し人を引見せらるるも又多しり記す  
同廿二日在哲法平と曰く一々茶葉の種の内雜種  
あり ○吉田家譜小言由法平は此号を小入貢使右の由石由之  
記如右を由守り善枝伯移移花を局一と上と小中善徳  
目由五号内禮して感賞せらるる云 同十月新日新造  
碧出本新橋秀賢禪家景系國扇風一雙を號し二日  
天名西樂院送物として之を號し二十卷景屏風坊を  
號し六日惠工務師を乞く内書景屏風日本社景  
を新造の善助小由く乞の由記 作出別惠工務師と  
五號し一と也同十六日江戸 入佛同十月上院同

世良田近江古寺を以て其奥新田金山の麓に一寺を  
以て建之是を大光院と号し義重義貞而朝臣の旧跡を  
り彦忠の由る所と別名湯小池と云ふ也此道三寺あり  
是月強肩小 還中同日十八日鎌倉在岩院  
小依之 鎌倉二代將軍小栗九代の日記の事と云  
上原保曆間祀所持のよ 別之書 伊藤鑑之(き)の  
与以(は)十九日初小月之 鎌倉在岩院保曆間祀持  
祭神前小依之 是年神大敵公南て八筆  
松の繪小和方を揮筆せらる 慶長十七年二月  
清和少院之 在盛衰記是日考しめらる  
廿四日水運交あり 同日十日伊豆山海若院結  
日本記を撰し其春を以て讀志めらる 十一日道  
春と道を論しめらる 中上權十湯氏新伐の由  
論あり ○ 其哲同羅山文集に載又退松原稿小 神君の  
此前小院之天下至大者至強者理と云ふを學校にさし何の

書少出と作し一時畫一元萬年と云ふより一  
云云天下の右云ふりと作らむと云ふ 畫一元萬年板圖也  
今昌平學問所より 同日三月將軍家強肩小 入御あり  
大寺新様は白根之方而是股字額をせらる 同日六月  
少方乃集(曾)子子貞一貫の事を下問せらる 志湯武の  
論あり 同七月十八日宋宮造物として其書抄二卷  
を撰し毎日置程高宏初以能子能子能子能子能子を撰  
し依之 諸玉齋夷の物語を問しめらる 同八月三日科  
法華を傳郭山小治ふ 十六日大明人一宮在昔経書を  
を上原亦大明人祖交 伊藤小出の依之 有人を召之  
唐古の内雜談あり 同十月に平小治中 武州忍邊小  
頼一あり 十二月十五日強肩小池強肩 先年道春小  
余して其強肩要を撰上せしめらる ○ 羅山文集又其表  
年譜小 大神君書小如讀在強以之 伊藤素使を其抄云  
慶長十八年三月強肩小池強肩 同三月三日



月強府(還) 同二月五日山僧學問作念 師前  
不施之即刻不可開云々 作出する同二月七日山の  
傳徒下向のよー 上受を違するの如く後九日出仕を  
く文章を去持多(き)る 作出する類い為政以徒登  
如の辰辰を如而辰星共之と云事也 同九日山の傳徒  
文章を推く 師前是法作有知清類小家樹多花果  
元生跡在樂と云教を作らむ 〇玉音抄の論語が為  
政以徳云如の辰辰を如辰星共之と云事を文に去せ此如(い)は  
只今天下靜謐あるを 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く  
権現様内説 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く  
共之に徳を以て天下を治るを徳い何能く多事と云事也 〇辰の如く  
と 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く  
七日冷泉中納言云為満多事 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く  
〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く  
問せらる道長云二箇の初るの如く 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く

檢校法性院政通といふ八十余の老僧来りて云く 大古國の徒院  
尊の招魂のり守りと作せぬいけき余まうして問ふ政通家宗  
に招魂の法いして加持を爲すいありされとも字子鳥の唱と云  
いふまゝい知り傳へて魂を呼ぶと云事ありてかくやと云  
いけらむと云 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く  
女治要と見親政要 結日本記延壽式 師前より出され  
〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く  
家宗不傳云云兼之 淨土宗の如く 〇辰の如く 〇辰の如く  
卷を教を師に 師前撰志めり 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く  
存するあり 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く  
を教を 師前撰志めり 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く  
七日今夜五事と 師前撰志めり 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く  
講せしめり 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く  
の授書 師前撰志めり 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く  
讀む 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く 〇辰の如く

一 定めりしん、為小公家の祀祿は百書写あり(キ)のち  
三代実徳西三条朝持のち玄上人 ○光記六月廿四日  
のち撰小三条及小三代実徳廣徳及小文徳宗祿者之由先度於  
中前出兩人書小法作止々と云由翌年二月并一統の後七月廿  
伏見の院之武家法度十三ヶ条同日十七日二条并小院之公家法度  
度十七ヶ条作止々云源蓋一此小甚むるや詳之祀祿の文を  
詳小する小 神君とと厚く學問を好せられ給小一統の供業  
を開く一むるとする小高つと首と一して公家中の法式を礼  
定せられ給小不意あり能い公家院い多くい家供を給して極く  
そ方を出し予を許すは時小日記を控りして事小論あり  
と云也 神君是に古氣せられ給と云之概然として遂小日  
如の祀祿法家の傳記を考く蒐之撰傳寫せしめられ遂小  
兼世の龜鑑と云んも此撰書國言む一之爲者熟讀玩索を  
一 同日十八日女對馬書 中前小出云、女對馬  
目、江戸、撰、一、あ、江戸、小、是、あ、き、あ、あり、是、日

形稿式抄抄轉去亦日の返出初本日本初本の祀祿仙  
洞并九条及友勢小是あふよ一 月祿本洞同四月  
冷泉中納言為滿花鳥井中納言雅庸強身兼  
古夕集の秘矣深括二國の大事を此文白王朝矣域の  
出廢流を憂させぬ古書を搜宿庫小館(す)せぬ小依  
之、人多之是を製せし又は書六經の節小通せしむるの  
を顧問小條(弓馬御所)小精一き老いも之能を成試  
曲在云小技の藝小多ま之用ひ給する事あり 同日  
月二日仙洞より 延喜式を抄し厚同七日形稿より記  
録の元云 中前小上々位上洛の時悉く内書写あり(キ)  
との内書又のよ一十六日江戸より 小山の信茂文頌  
る十本文歎い厚子之徳風や 小人之徳孝や  
予加之界必偃頌、是位法位や 間友常位法華  
中前小院之合院院之書法之同六月廿六日卷  
女乃讀日本記不里の如十卷中云山信小作身





其と令相託 序前(具)抄後傳一信とは機嫌克之云々其相  
面と申候々云々 幸甚良大仙位其の時頼朝申事加の起承其  
繼小記下々知 序前にて此為見え馬千匹米壹万石黄金千兩絹  
千疋云々申籠入々今度の諸人の装束詰々具已下迄遂小見  
小々此後之云々手間入々六ヶ交々此位々申機嫌克之云々  
一此位申々云々 同日冷泉為滿為家々自筆候  
為老左好右好の書相持候 序前申候云々廿日  
花多申中納言新分仙の旨を致候云々同日廿日  
多井申物事至次の間云々原氏相執の請報あり  
同日廿七日成願豊後守江戸へ攻り 大市所々幕  
下(書)精三十紙迄をせらる候江戸申文庫小云々  
本記出稿あり云々表々之 廿日歸去三十紙内廿二紙  
今此文庫に現存云々 廿八日菊  
亭殿下り板倉伊賀守(老)を快書申候云々律令  
令儀文庫申候昔白秀次云々菊亭殿下り老云々  
今又強候云々此老云々 ○光記菊亭殿より律令云々

其は上内燈之由右府より其松云々此中具後 上禮云々様  
備老多々一紙差下々あり 同日廿九日日邸唯心侍中  
購要州十巻を致候云々令儀文庫の本や豊后関白  
秀次是之云々之日邸家々繕り云々一紙や 同奉八  
月六日信長老太判一禮を致候云々作云々書至室  
や百紙云々或百紙用板云々一書云々相字云々万字云々  
あり由仰出云々<sup>是桐版活字</sup> 同七日山崎宗鑑云々一代集  
日邸唯心云々云々一紙云々九日菅應業雅西人更云  
の定家公等在令集道遠院祐名院等云々代集等冷  
泉為滿并公家殿云々云々一紙云々云々云々  
集、願不審や云々十日公家殿令地院云々法云々  
出心經云々同依理云々成云々真蹟云々云々親王道遠院称  
右院等伊勢相執二紙同原氏相執系第二巻并定  
家公新勅撰号云々云々原諸人目を驚云々廿二日  
山右禪院 序前小紙云々其冷の連云々其紙云々



長光五子書之有光坊院系長卷をらるる可に此所抄の  
中出書鳩五(寺与云)同十日 仙洞より類聚三代抄  
六卷聖武より一巻院年(年代記)十六卷類聚聖武  
二卷古語拾遺若法要集神皇系若十有光坊院使と  
して持奈を(夜)乃之(道春) 中前小(院)之(是)也(後)也  
同十日 台廟出登 菅山(院)同十六日二巻(出)奈(乃)同  
十七日(任)老(の)出(陣)等(不) 源(師) 同(日)南(光)坊(院)次(小)  
之(一) 仙洞より(令)集(解)等(同)市(九)日 勅(使)廣(橋)  
大納言兼勝之系大納言之(書)條(任)去(少)有(り)由(感)芳(の)  
勅(を)宣(同)年(十)月(十)日(出)身(の)依(之)南(光)坊(院)信(濃)寺(兼)  
陸(を)封(上)是(中)尊(總)目(小)兼(陸)の(院)あり(を)以(之)之  
同(十)六(日)今(日)より(南)條(寺)之(山)僧(書)写(り)の(節)迫(不)  
身(止)也(同)十(八)日(關)東(寺)和(睦)也(同)市(二)日(出)物(云)出  
内(名)啓(一)同(市)二(日)傳(長)老(日)師(唯)心 中(前)小(出)心  
傳(小)曰(今)南(條)寺(家)の(記)録(出)寫(り)の(記)録(一)公(家)也

古(今)禮(義)式(法)の(書)遠(り)たり(き)与(之)り(五)觸(ら)の(如)不  
主(任)色(を)之(由)傳(ら)る(同)市(六)日(京)師(不)入(傳)同(亦)  
六(日)令(院)院 中(前)小(出)心(今)左(傳)ら(る)記(録)お(の)因(曰)  
事(記)古(今)統(文)釋(菅)家(文)集(弱)之(記)新(日)抄(記)  
内(裡)式(山)槐(記)類(聚)三(代)抄(出)新(り)右(書)同(因)傳(長)  
○(出)和(日)記(小)旧(事)記(長)古(記)新(日)抄(記)神(龍)院(す)り(出)月(記)の  
左(多)院(小)三(代)家(孫)の(三)系(大)納(言)也(り) 文(注)宣(孫)の(廣)橋(大)納(言)  
才(り)西(文)記(の)任(生)信(智)也(り) 山(槐)記(の)九(系)院(す)り(書)系(文)産  
の(系)也(り)江(河)中(の)二(系)院(す)り(内)裡(式)の(古)抄(す)り(の)と(云)也  
同(亦)八(日)在(泉)内(同)市(九)日(智)恩(院)八(宮)大(光)寺(出)門  
記(一)系(院)廣(橋)大(納)言(三)系(大)納(言) 出(野)色(目)録  
七(系)系(を)指(ら)る(正)月(原)會(す)白(馬)山(院)會(諸)寺  
事(准)后(親)王(位)階(す)官(物)等(以下)云(く)傳(小)曰  
是(を)吳(同)乃(寺)の(令)傳(令)核(式)を(考)ら(る)此(傳)府  
古(傳)録(さ)る(き)の(与)也(傳)也(是)年(乃)東(寺)校(也)





諸君が政宗定家并傳成の女自筆の古本集七部  
を抄録して 市價不備ふ 市價不入の宛をいの上  
致書より再無云と云ふこと (在政宗の親壽の懸たる  
ことと云ふは再却せらる同本四日將軍家金地院と  
して武家の法度集と云ふ 仰書の由因院作記らる  
同本九日在古宝禮院果家書を我并大所以筆讀を  
持参以同くは禮を讀たり 金地院を養老を同本七  
日將軍家二条小 傳中 俗人養樂之番の云家記  
諸大右也仕同年七月廿日云々并諸大右二条城小  
登堂法度集通出能至く同本二日傳長老法度の草  
葉 市前不指く付也(一葉) 將軍(云上云) (市の旨  
仰也) 傳中九日 大所所南殿の由傳中 原氏也  
法部云家記記を記也 假名記二行より一傳らる日  
所二条記多行法部父子馬丸なり 同七日武家  
法法部十行集を頒布せらる云々 一不文武馬馬之

乃書こお者りすと載らる同八日今日冷泉為滿泰  
上中仍之原氏也禮部入の事 同本云々の事 如定家  
自筆の書入の抄の由記る 揚花女の如注釈の上即  
之 是を銷すと云 同十七日 抄中并云家記法部  
十七日集之内予一不 天子法部能の事 予一  
諸學問や 不學則不明古道而能致太平者 業之有  
也 貞觀政要文也 寛平造法小能 不究經史一編  
習群出法要云々 和名自光孝天白王未施能 能為倚  
諸我玉為信や 不可棄云々 所載抄中抄 習字也  
抄小の事 同本日中院小原氏也 能初音の卷也  
讀一の同本 九日 抄部を抄之 中院を一して 原氏  
西諸部本の卷を讀一の事 不傳長老冷泉同傳を障  
子を隔之 女中記同く 中々も 不令 養大 抄 爲 人の 同小  
原氏を讀之 抄之 又 能 抄之 云 同本 八月 二日  
抄部を抄之 中院を一して 原氏也 能 部 本 抄 卷 之







出家よりくくしてん之忍容々○梵舞記十六日相國の由事以神位  
之後神位不降長久能山遷座(松)未定此作也○五降日記  
十七日南光坊松老も在哉か中和長衆方て内儀是社以下佛造言  
内普記ホも老衆皆等字也有りて是連ふ也来○元和年縁久能山  
寺納内遣言して神小寺口茶代、海古宗之、以戸増寺源宗上  
人占五重血縁は在傳多古を奉天名宗の佛法は總少南光坊僧正  
天海と内宗不敬ありて上神道志内信授り如分り 大権現小  
宗一 久能山内宗立神原内記と着内宗任附宝せらる 久能山内宗  
より真云の寺も之代、右僧とつけ寺も出る事多し今又又 此  
宗一社僧として天海占天名宗の字釋と一山の内宗言、久能寺  
と号し一天名社僧方と一茶山大権現と一上奉る按さる小神社  
考ふ久能山の強は玉う階殿あり物小一ふい階山と号し強  
守ハ十二割権現あり能山強地平昔久能山といふ、松樹中より  
堂舎のみを親善像を説つても固て早て補陀洛山より久能寺  
といふ又聖一玉竹初久能山の老年法師として名を好む事といふと

き、古事占天名宗の如いりて号れと詳し世次元和六年 二月  
十日也事を伏し 東照大権現社領事 都合三千石内千石神供銀  
二百石社僧料 千八百石神主料 右件の在跡、尚有滋殿の内所、十村  
の在又事進之早、永代令停止権断使、柳原大内記照久全令  
社納事諸取亦可節仕之状如件 ○梵記十八日當山は移之處地形也  
年最衆本多上野分也井大銘改古道市刀成院集人正松平有造、板倉内  
膳秋元但馬江上七人各詳説小之 重刻堂規古之普法や十九日  
役殿作元次三回四方の堂井垣鳥長雙灯炸二立立刻遷者有り  
尤右絹幕も川有り 是等絹布を忘く之役殿占二十九間寸之  
絹布二十三帖是等絹布十端之  
久能中社事神神西市平市矢 楯降は海に輝云 神前  
西教奉<sup>加賀</sup>市神境由馬市市幣柳原内記持之給云 市藥  
供奉鳥帽子上下市平市矢 楯降同右市作法  
や市幣ハ柳原内記持之給、市振之也用之儀式行  
明り下も志あり 還聖有り 以因陣也市の時悉拂

地了身次鏡を内之陣へ納之教来悉以左麻と推  
之市鏡と手車細や一次に神供一紙後某六紙  
中後某三十紙あり皆精多なり一次に執絹と奉儀  
神供や内施一作法了身也次に種加持次三種太麻百二  
十唐福之次祝戸路文謹白元和二年卯月十九日亥時  
撰天吉日良辰乎太政大臣從一位源朝臣家康公乃御  
形像乎駿良有渡郎之能乃奉葬高嶺仁備神供後  
某此狀乎安外鎮坐且天下靜謐彌繁昌長久之基  
乎守利益与恐義气奉申辭別仁申佐久自然參集中仁  
不心不淨乃者在是御廣我御心惠於以天守護幸給陪止  
恐義申次不拜次拍乎次退下次奉幣兩度再拜神  
原内絶作法之儀申教上次年為元若一降中多上  
柳七井大炊女為常乃成既集人松平左衛門権左内  
儀祐元但馬於内陣在之午可代と由り入也次に右  
退下と須者身中、海や一〇玉作日記不主刻内殿日記

五祀神、是為祝、右神統院元河内記侍と卷を、内作法其後  
右の内神洲紀の内社以由所及之介内遠管内書法ホキら初り不  
也中多て、内社系多根先之同、之能山の山下、由是記作身至  
之入内法所あり。〇梵舞紀亦二日俗神供次、公方採久能は社  
内系所及及之奉及岩陸介、由是及内社多や、之降の神内書、  
次に能内社作車右右和、此作身多之次社及之、右和方、一奉  
厚又老之一社社大明神送千本堅本奠亦、此社及治巫女を次  
神供不次及及次内書、タセタラ、次神、内離次樓門、次社亦の及、  
之、上十四の粉、〇元和年縁内代、神、宗子之内、之、増上、  
伊位牌を、之、内書、内建、之、安國院殿大相國公徳蓮社  
宗、養道和大居士。〇神原家記、由、祀、照、久、元、和、年、四、月、靈、樞、と  
日光山、内、時、仰、不、信、之、系、祀、の、之、を、用、る、神、希、る、可、代、の、一、と  
、是、年、名、能、山、法、智、社、所、及、也、當、法、供、所、  
樓門、多、居、由、建、同、三、年、二、月、廿、一、日、朝、一、と、  
東、照、右、權、現、の、神、号、を、給、ら、せ、り、同、三、月、九、日

正一位を給らば同十六日内建奉小為久徳山より下  
御五日光山小山路等○其武家孫小元和之西二月十日  
古権現を孫長多徳山より此日日光山小山路等は是 神君由  
建奉小位有り是日寅刻天海僧白中より此外正統也并大徳院利  
猪松平左衛門右衛門正統元但言古者孰も二百余  
騎を遣(雜兵一千人)孫長久徳山小登系 天海僧正より一〇〇  
と元光方藏冠弁等と孫長の旧例あり 如多正統也并利猪松平  
正久板倉三昌秋元恭純成隆集人正成 右孫平刀並猪中  
山備前信吉 神原内記照久正光小波小 徳事孫小永井右左  
太丈 能事孫小孫房方十人但此輩と云○光廣は日光山純  
正小四月八日佛誕日小 此殿塚小由定元正○玉作日記小同  
十二日將軍家高地を孫長立日光(中成以右由云)  
同四月十六日日光山 神中社(山邊)河○能事孫小四月  
十六日初社遷宮位殿より遷奉り宣命使河孫平右衛門  
東照大権現神号二月贈正一位宣命使とすむ草幣使法

周寺一宰相共房草幣之事と云 同十七日 御中  
社小流之は法法令の事と云 台殿社系正位  
二年十一月二日官号 宣下 △神基到の関  
口刑部女博氏縁城親が女海榮山及 山次之を法入  
黒河燈籠天正七年九月十九日城明け梅之生害  
幸長清庵寺に法葬送 西光院及と稱一色分次法儀の  
河原齋館を豊長左衛門の味潮日始天正十四年九月十四日  
碧樂亭小流之遊去内年四十八東福寺小内尋送  
南明院及と稱一第新正徳四年十月内供田五十石  
と云明院小流らるる○折葉葉純小 台廟由在也の程は云  
内幸忌乃為の内法云と執りかきしりの事云勢通を又内幸  
おかくしとせし料の地畠らるる(一)と云しと云(但持の事小まらせ  
金手内流入と云)

東



台徳院殿御世

秀忠公侍事

東照宮侍事男

西御の局 ○ 院考の事と稱次西々在東門依清貞長女  
 實ハ戸極之節左史右書之女天正十七年九月十九日遊室臺院殿と稱次  
 強剛就系古子并送 天正七年四月七日孝乃及瀨松城  
 小生誕生於君長 君長九 稱一草公 天正 十九年八月八日  
 從五位下侍從 或曰時也 天正 十六年四月九日五位下  
 ○ 西邦按小十五年西原の内家位院書小八字一烈祖成績由年譜  
 創業祀家忠臣氏往大成祀將軍家譜亦云云之天正十八年四月十日  
 世子登聚城時年十二忠忠世西成侍側秀吉抗使侍女月入室因太  
 政亦自結誓加首服授爵名曰 秀忠更其夜夜肩衣袴 秀吉  
 五金新大日使帝之執之手謂正曰七麻生質困維然結誓若衣  
 皆野狐故 吾史之為京極家 □ 今亦實協遺幼兒於吾必竊吾備毛  
 之外雖修礼而之實納以爲質也 吾毫髮無所疑何用質爲汝等速  
 獲送還致府更改亦詳附 中畧十二月廿九日世子叙從四位下侍從云々  
 と一 天正十九年西原の内家書と記すは十二月廿九日由五位と云々

幼と云天正十八年猶小童形長九君と稱次院時ハ西原の内家書疑小  
 一と一 天正十八年 從四位下 小對を云ハ汝等を云々如一と一 天正十九年 亦九日從四位下

天正 十八年 二月廿四日由從五位下 同 年 十二月  
 天正 十九年 十月右近衛將少將兼武

藏書同年十一月八日右近衛中將 ○ 小年譜右中將元侍從四位下

天正 元年 改元 九月九日權中納言

文祿 二年 閏九月十日入洛父君の内亂 旋也

文祿 二年 二月十二日辭權

慶長 二年 四月十日長女千娘君生 ○ 内女堂内臺所慶長八年七月

文長 二年 八月秀吉公伏見城小院之典以依



市食交同年六月四日 還席 孝長 十一年 江戸城

市治樂六月七日九日並生 壬子代君強河大納言市每堂

市嘉元元和四年十二月從四位下於將六年八月廿日參議九年

七月廿七日從三位權中納言寬永元年八月封強孝甲信之内三年八

月廿日從二位權大納言八年九月廿日陳九年十二月廿日遊益孝器院

夏葬上列言海大を寺 同年九月廿日新成小なり市

移徙 孝長 十二年四月市城市張清同四月道表を

了了三田若澤を去り讀志めり同九年九月廿日宗義

智刻鮮の之使を携へて江戸小なり 壬子年 真物を

新中二使 將軍少少小孫福將軍少より市海内間を

朝鮮國王小をさるる是市高代朝鮮本聘の始なり

十月廿日和子生は如堂市嘉元和を六月十八日市入内 市上

月十八日立白皇后二年十月九日号 市福門院延享六年六月十日

市明葬京泉涌寺 孝長 十三年三月學校を重松小本

市活版市繼(市嘉元の志を加え志めり) 七月鴻澤家久

朝鮮  
本聘始

市臨初

市琉球市を賜の市出を下りて成功を賞せらる八月

臨府(市嘉元)市起兵を同せり 同年十二月永樂

院の通用を林止為院通用を仰せり 市貨事累示

市臨初を市臨下作市臨の吳初代之の在臨のことあり

孝長 十四年七月十四日甚苦を吸脱あり市林少を

る同年十月廿九日市國初市少をの法大石十三年 月の標

市臨初より市臨初の儀或之○按市臨初の時分始る市死を市河

市死を記して下毎年運送を是年より市死路りと 死四月三日

と成り市嘉應三年をめてあり 同年二月臨府(市嘉元)集

市起兵を同せり 市室三月同市初王市麻樺を市後

在り市初誓あり 物奉小遣あり 市三月小玉を

還席 同年六月尾張市若護を城を築あり 同市初誓の城を

同年七月丹波市島山城管樂女同年八月市八日琉

珠王尚寧姫之入朝是年侍醫吉田定安女父系物之造  
 相子倉方と稱す **孝長** 十六年二月六日より江戸城  
 内書讀坊より同月廿七日淺湯成院讓位同年四月  
 二十日 海北尾院昂位 法皇成院中三 同年五月七日  
 西之居士生○孝松丸松平肥後守母於靜方神尾氏寛永十二  
 年九月十七日逝淺湯院及葬 再公舎は 寛永八年正月十二日福  
 保科家の遺領三万石十二年七月廿一日封羽呂山形城廿年七月四  
 轉より長存御城兼延二年十月十二日正四位下左中将寛文九年  
 四月廿七日致仕十二年十二月十八日逝号 土津靈社葬 孝長猪苗代見  
 稻山 六月 抄裡築城内書讀 創業地八尺一間小て根二  
 數五百石の作神と云ふ  
 今年より法皇の御成を江戸へ收納せらるるに於て  
 勢ありて強河へ収め強河孝長は尾長の御郷 尾長義直解  
 尾伊預室々  
 亦右玉江別十方石、強府へ収めらる **孝長** 十七年正  
 月二日武家の諸法皇御作 按後政編今年内書目及因廿  
 年七月内書目より 東照宮  
 蓋強りあり 同年二月侍天宗と為稱すあり 同月

禁中  
創法定

法勝上

大坂  
内陣

孫身ハ亦祭如き四月 皇御 同年十二月十二日 抄裡  
 他同内書讀坊より **孝長** 十八年六月 抄中  
 制法を定らるる十二月新中 内裡 還書 當今内書  
 院  
 他同 後瑞 **孝長** 十九年三月 東照宮江戸法  
 道通丸丸ハ亦老同 十五日 西丸ハ就之ハ藤上同  
 月却湯水通湯城を壞之 同五月五日田ハ藤上同  
 同年二月孫河本沼津城を壞之 同年四月十日從一  
 位右大臣 法皇九月九日作  
 孫河本沼津城を壞之 同年六月廿四日正轉任内  
 記御内陣あり 法方名を登 城同年十月廿三日  
 右内陣内陣 江戸内を登 同十月十日 付之城ハ  
 入陣 同廿日二条城ハ就之 東照宮内書讀坊同十  
 五日 伏見より平野ハ亦長陣 同廿九日 勅使  
 内陣營ハ亦系 同十一月三日内陣營ハ同山ハ楊  
 子居 同十八日右内陣内陣 元和 元年 孝長廿七年七月  
 廿九日改元  
 正月十九日葛山ハ亦付見城ハ 入陣 同廿四日二条城





五丁石占一丁石迄の軍波を定らる是年之徳山出部  
社降及中堪堂内供所樓門多指昔中達立是年江  
戸神田川を繋ぎて堤を築る同年十月之末より  
して強奪の如く申す中之庫の内書籍を分乏尾  
浪純伊水戸之家不揚る同二年 初日光山 四月日光山  
内集詣同年六月内上流同十八日 内集内同年八月  
亦六日付見小籠之朝鮮の神仗及至 埽地紀是年  
紅葉山辺印廊門増建同年十一月八日日中の回祀  
と希世の古本、江戸内之文庫小収らるる○道春年譜云  
車月日と記され考ふる中如日記の中如孝子初（入分て内多る言  
及一階下上田管領帳不身記中元和二年 辰十月八日とあり  
是小方と云ふ年十月内流廢少あり中如物を礎分して海府の後同  
月八日内之庫、初一と明あり **元和** 五年内上流九月  
廿日 還御同年十月日光山内集詣 **元和** 六年正月  
廿日 攝石垣内集詣同年四月江戸城内及中

重清とあり同年六月十八日中如の姫君入内○後  
水尾院女中内傳和子長十九年四月 入内 宣下元和六月八日江戸  
内集詣同下九月内入院六月十八日中如 廿日 同九年十一月十九日中如  
正明院降誕迄あり玉母様と稱する寛永元年十月廿八日中如  
同六年十月九日東福門院様と稱する延宝六年六月十九日中如七十二  
是年内城小ノ丸達○寛永江戸島を指す小竹橋内門内あり  
路内古納言長女内信長あり 中如々々 台敷内如男内知石中  
如君元和之年 信以小法城十内流之向、中如増 叙任至之同  
九年七月從三位中納言宣元元年八月孫孝とあり中如石同三年  
八月權大納言同七年抄之之甲州、中如長尾言理、中如同九年  
三月六日同新大を中如逝去二十七 **元和** 七年十月 落水尾  
帝より勅叙 宗朝類苑を編み 中如前小籠之令記  
院、中如を諱とす前、中如宮内入道寂照入案一、  
宗帝、中如を諱とす、中如中如、中如、中如、中如、中如、中如、  
中如、中如、中如、中如、中如、中如、中如、中如、中如、中如、  
**元和** 八年四月日光山内集詣同月廿五日

中城の書状を以ての忠告なり 台原西九 市移使 歎願本長美忠吉 十一

月二日市城に市移使 元和九年二月十三日屋長

勘定不届申す 四日日光山山本参詣 五月市上候と

一、江戸 市参詣 六月市入候 將軍御意を

家光云、市移の事、不依之、あり 同七月十二日、二条

横へ 入申す 或云同月廿七日市移使市料 一万石市移使と云正史不見 同廿七日是なり

市移御書、市移御書、同日、市移使、同日、市移使

日迄之、市移使の事、御書、あり 〇年、市移使、和二年、市移

組、市移使、一人、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

今年、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使、市移使

寛永

八日尾張府及形不 酒師水戸松房太丹

三虎市古伴之格樂 上寛因八月九日大内亮所内同及

少下 内知由一 酒師 酒師河内長八水戸松房太丹古伴

左堂言及尾市玉持了り **寛永**三年二月廿七日能伴及

左形一 酒師五市取伴、水戸松房太丹左堂言及虎市、格

樂内持説同五日内及改長八梅田の包取地ト上亭一、酒

師 五月市八日 大内親内上取ト一、江戸市取等者六月

市日市八日 七月二条坊、市止為八月九日 大内親内

の増上 酒師五坊中 上説八月十八日 寛永九年九月 大改

右内同及十月 江戸、酒師 **寛永**四年三月二日酒師

左形不 酒師、江戸古伴、水戸松房太丹羽長寺守、五月

二日尾張府及形不 酒師、江戸古伴、水戸松房太丹之化

宗前有り同十四日水戸松房太丹 酒師、江戸古伴、尾張

為直左豆花宗前有り、七月市曾酒師河内及形不、酒師五

**寛永**五年四月日芝山市氣宮 **寛永**八年二月亦八日尾張

左形不 酒師、江戸古伴、水戸松房太丹、三月十九日尾張

為下、世界の島全上上、君臣言 同六月亦二日市、江戸松

之身將軍家取之西九不 酒師、**寛永**○年○月○日、

飛間の例不、江戸の例を連、江戸松房太丹、善徳の耕作の

為有り **寛永**九年正月、江戸松房太丹、信軍家 日、西九不

酒師、江戸松房太丹、信軍家 日、西九不、信軍家 日、西九不、

酒師、西九不、信軍家 日、西九不、信軍家 日、西九不、

酒師、西九不、信軍家 日、西九不、信軍家 日、西九不、

酒師、西九不、信軍家 日、西九不、信軍家 日、西九不、

酒師、西九不、信軍家 日、西九不、信軍家 日、西九不、

酒師、西九不、信軍家 日、西九不、信軍家 日、西九不、

酒師、西九不、信軍家 日、西九不、信軍家 日、西九不、

酒師、西九不、信軍家 日、西九不、信軍家 日、西九不、

酒師、西九不、信軍家 日、西九不、信軍家 日、西九不、

酒師、西九不、信軍家 日、西九不、信軍家 日、西九不、

酒師、西九不、信軍家 日、西九不、信軍家 日、西九不、

酒師、西九不、信軍家 日、西九不、信軍家 日、西九不、

酒師、西九不、信軍家 日、西九不、信軍家 日、西九不、

酒師、西九不、信軍家 日、西九不、信軍家 日、西九不、

酒師、西九不、信軍家 日、西九不、信軍家 日、西九不、

酒師、西九不、信軍家 日、西九不、信軍家 日、西九不、

治承大内侍重朝と稱し重朝重長は太閤公の吉公の孫也  
治承元年九月廿七日伏見城に治承天皇定永  
二年九月十九日燕京府治承五年九月十四日増上寺に治承天皇  
崇源院崩と稱し重長元年十一月從一位を賜らる  
同九年九月治承天皇崩治承正二位中納言を賜らる

△大猷院殿部也

家光公の事ハ、名は院殿部也

男内如重朝の重長重長重長女

治承大納言

慶長九年七月

十七日江平西丸小舟の誕生治承大納言

治承大納言

行子代君と云

保元元年正月八日山王内宮祭儀

治承元年十月

十月五日西丸西丸治承大納言

元和二年十月

西二位同日權大納言

元和二年九月七日

西丸西丸 〇云是日治承大納言

治承元年治承大納言  
治承元年九月廿七日伏見城に治承天皇定永  
二年九月十九日燕京府治承五年九月十四日増上寺に治承天皇  
崇源院崩と稱し重長元年十一月從一位を賜らる  
同九年九月治承天皇崩治承正二位中納言を賜らる

治承元年治承大納言  
治承元年九月廿七日伏見城に治承天皇定永  
二年九月十九日燕京府治承五年九月十四日増上寺に治承天皇  
崇源院崩と稱し重長元年十一月從一位を賜らる  
同九年九月治承天皇崩治承正二位中納言を賜らる

治承元年治承大納言  
治承元年九月廿七日伏見城に治承天皇定永  
二年九月十九日燕京府治承五年九月十四日増上寺に治承天皇  
崇源院崩と稱し重長元年十一月從一位を賜らる  
同九年九月治承天皇崩治承正二位中納言を賜らる

源氏長者右馬  
寮は監牛車伏を賜らむ  
同日八月は系内〇同日八月九日將軍宣下は院第百萬石以上  
信房公の娘白江平山入嫁 **寛永** 元年三月廿七日  
大御所様より出陣志多平を以て讓あり依一山一  
内膳代大右衛門守 堀一して初帝を連る同二月十八日水戸  
松平左の急務不測沸立四月廿九日藩生功徳寺力大郎  
と免小 海軍を同六月十六日夜院宣中出納戸  
別田七之助を誅す内惟枯田七(忠)を切敷一自殺  
一力影流(忠)同八月十日甲斐中宿言忠長(子)繼  
孝而長右と孝(忠)を賜る同九月八日ヲ流砲の因  
ふ是是著弓砲の業 上院を十一月十日西毛才  
市丸丸(内)徳徳 是日玄鹿 西毛百石被 十一月八日廿市 和子中宮子

二五五  
番始

吾等の不同年十二月十九日朝鮮聘使出 瑞市親連年  
目黒村の少卿堂八所宛宛地と吳安長寺之先年法士  
の武善匠 **寛永** 二年三月十八日川越(出)初雁着長行  
院の儀 名院同廿四日 還市 同七月日光山(社)系  
土月晦日奉祀野市輝市流砲の之 株四(出)討留 **寛永**  
三年三月朔日約九小 海軍有以舟之間小放之 大市所  
在費教某初をかきしむふ二月五長(命)一太字子 和字砂  
を還せしむ四月日光山小出多訪五月由為臣名出助也  
梅田の急泥上亭、 海軍を同九月五長(命)一太字子  
解を撰せしむ同六月三日該解を撰せしむ五長  
四書五經の要法を撰しし是を撰せしむ同年八月の上院  
同八月十二日由系同同十八日送一位大右位九月廿日主上  
院水 二系城(引)孝七日 齋樂堂 銘八日和 齋屋(出)日  
名 社公大猷公和部を撰せらる **寛永** 行孝記類 九日  
市丸丸(出) 十日 還市 同年十月九日 江



古書院 番取

十九日江戸市船を運ぶ灰路より一五九の如し五月九日  
 尾形長尾新助一階市市戸長尾新助宗南出五律六月四日  
 肥後主加藤肥後守才度送元小左門下可領渡收  
 七羽衣因、配流八月十日自身豊鴻刑統庭中出老  
 中井上言司政切整〇古言録いこと改娘を刑す時  
 島田綱守子婚嫁の如き元格相係し島辰古付守(者)一宗に  
 如く送恨の存取一十人宗の如き通り古七十人書本之存取  
 抱五之刑了こと実費書本法とい死を久たる抱五、  
 一儀の如く信守〇十月五日後向忠長令後長法問不稱  
 一あり神の家を受給親少なりせり。寛永九年四月  
 八日古書院番取并給以格〇一番也多き宗長古以池所之  
 二番大田御中書給以川久保宗長三番大久保宗元能以池所也  
 四番海井書御守与政老石川久保五番大久保之孫正能以池所  
 六番田中書及政与政山口寺平七番松平伊勢守与政由七九郎  
 八番永井日向書能以伊佐吉書尤八八八宗(宗)身之同十同八月

小十人 能加 増

又二能村本民ヤ州能比大方係源五重入格担美格与能比言本九郎  
 故后十能之五之能也三年九月二日二能 西屯(宗)作守之〇四月  
 及名を之へ之能、  
 三能 一む同五月念能院和法通用集を撰す九月五日  
 法河右長女甲府市能信長九月八日十人、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、  
 同一年 十月五日初之能物を番二十人を為る先年尾形及  
 同、孔子堂を恩ケ園の建らんか、  
 寛永十年三月古書院番取  
 下 〇能承る力あり花する如の室承工二月十日古書院番取二の在

内番衆 市加増

進物 名、始







同九月九日日光山社系 **寛永** 十二年十月 及書

小倉寺系 杉漢法制定長尼と撰上せしむ同二月

九日市藩代大名乃山藩代一併借令文 係身〇或

云玉石寺系十年懸延細相止院池山七月七日市藩代大名併借

令引 係身言五十八子七玉西庫之とてり〇三月十二日

宗野寺系 義智と板川寺系寺調無とるり〇或

市並寺系 市並寺系乃 相列 彦彦侍重以柳

川非乃小依之 駒願保相津程 既係せり同六月

月廿一日市系の市法法系とて 係七時より

諸大名交代 四月小定らる同月市法令十九系

を頒布せらるしとてり 一系小文氏馬の道中可

お書と執らるしとてり 同十一月十五日路て 老中二月

市並寺のらる〇七井右衛門海井護國寺 相伊言河野老僧

坂田の言五入とてり 月書とてり 諸大名の預法由由云上云

与引 係身〇同十二月二日 諸寺及天守を上同為

与引 係身〇同十二月二日 諸寺及天守を上同為

四月  
交代始

老中  
月番

寺社  
奉行始

寛永  
通宝始

十二月十二日始之寺社奉行 係身 **寛永** 十三年

正月十二日始之評定可を設同四月日光 寺宮所改

逆光月 市社系同月日光 東照宮 廟改築造

早る 市登山 逆光小倉一と新二廟託を作らしむ

日光山社系二冊とてり 同五月十二日 伊達政宗の寛永

通宝と云石右利監之〇同九月系祀田の市章を改不

の社家信使小堀小同十二月新解使奉職を及書

小倉一と市法同着せしむ且市法言と草せしめらる

是名家の代儒臣(市田)の通書を草制せしめらるし

是の如之〇家譜云是武將与朝鮮紹若書使禪僧作之既若

旧例を設知使を奉若之と書新小を奉朝鮮 人と奉法行

小島始り本歴初とてり 市寺堂覺佐佐 大猷院極由文

如右の如くの新語也とてり 市寺堂覺佐佐 大猷院極由文



高直公の... 兵部左衛門権固位の位... 源池公... 末代...  
 之... 是年... 寛永十七年二月... 寛永十七年二月...  
 日... 社... 寛永十八年... 寛永十八年三月...  
 寛永十八年三月... 寛永十八年三月...

系家

九月... 寛永十八年... 寛永十八年... 寛永十八年...  
 同八月... 寛永十八年... 寛永十八年...  
 寛永十八年... 寛永十八年... 寛永十八年...  
 同八月... 寛永十八年... 寛永十八年...  
 寛永十八年... 寛永十八年... 寛永十八年...

大石  
交替

新書

本海を編同三月十日金明院並正念下迷了の大  
橋を以て海軍傳乃五岳の傳亦不令一丁氏家系  
を編集の事小致らしむ同四月十七日日光山法系  
後同五月九日法藏代右左の交替し六月と定めらる  
同東の饒多の右に平年交替と作らる寛永十  
年朝鮮の賀使奉聘登言竹千代君頼同七  
月三使日光山 帝宮法流同八月七日初年新  
小番四組を置る○此の事書と唱而番と此の番元二千  
九人 法新 結構之間並元年六月十日新組二組の事是  
十月十日と正徳三年五月十八日法新組と書 五如享保九年  
二月十日と正徳三年二月十日と五組並同十月七日西九  
組出番を省組並此と此組中共再云 市本九組は 作留是方  
三組の事九月十日と此組並同十月十日西九組並二組並此の番元  
何れか寛政二年八月十日八組並同十月十日西九組並二組並此の番元

御覽に此の海軍傳は正徳三年八月十日八組並同十月十日西九組並二組並此の番元  
四月十日七組並同十月十日七組並此の番元正徳三年八月十日八組並同十月十日西九組並二組並此の番元  
三月十日七組並同十月十日七組並此の番元正徳三年八月十日八組並同十月十日西九組並二組並此の番元  
○同八月天海僧正登病 將軍家東麓山小 酒師  
五ノ在子自某湯と記○天海、東麓宮除く山師信主  
陣營小陪侍一者不稱政と在り山師信主 記云 某山宮  
天海といふ 將軍家之公の山師信と定むる 亦不稱將軍  
に在りしやありと云馬く為 將軍家少少しと云山師信主  
代小起るに十月二日天海僧正寂年百三十三日光山に葬 ○  
同月晦日山連帝有同九月十七日武家系圖成 山師信小  
傳小漢字云五十六卷和字五十六卷後年三百七十七  
卷寛永法系皇傳と云 系圖傳序 同亦一日法系皇傳  
傳小徳壽七十一太田傳中り次皇系一書編を○備前一  
文字法系の力を編小と云の推考編又あり 一書十卷並り  
○同十月方 明白院傳位同十月西百 法系皇傳

即位

法皇院白子

是年

東福門院の下の位千下

初豐隆寺忠秋朝祥法年七歳迄は終身素行を修し

了京朝小親也○善那田名播小二十年東福門院有願

開朝舞曲頃以来之河原宮有忠秋素作親而親系

初は是也 正保 寛永正年 元年正月十日法家系圖傳編

道原の証人(夢留)著書○元日也小平月十日今法家系

皇法 傳身合首尾証人(弘)也下河原宮有忠秋素作親而親系

昆毛先浪五好(之)院三詮浪五好(之)南澤寺也之廿好小袖

之(之)尾長及安祿左仙之十好西の浪五好(之)水戸夜也下(之)

介(之)人(之)右(之)之(之)同老中兼太田信中正列也 共之也

傳(之)長(之)左(之)右(之)之(之)之(之)○二月十九日也傳(之)

三月市井小周井山村 布山小旅(之)麻村岡九月廿四日

長松居生○調重仁松平在也政甲府宰相初信田(之)也

書方多抄物傳(之)行昌也禮順性院及安四(之)也

信甲(之)也(之)永應二年八月十二日没之位推中将明曆二年七月

九月九日移遷田(之)也宣文元年壬八月九日賜甲(之)也

二月八日冬

儀延宝六年九月十四日逝禮清陽院及葬(之)也通院宣永二年十月

五日(之)也別高通(之)院贈(之)也六年八月十日贈征夷大將軍

正一位太政大臣○同七月十九日堀田(之)也

小(之)也(之)也

海寺(之)也(之)也

廿日(之)也(之)也

弟(之)也(之)也

臨(之)也(之)也

法(之)也(之)也

以(之)也(之)也

合(之)也(之)也

事(之)也(之)也

女(之)也(之)也

女(之)也(之)也

女(之)也(之)也

女(之)也(之)也

女(之)也(之)也

女(之)也(之)也

女(之)也(之)也

女(之)也(之)也

女(之)也(之)也

女(之)也(之)也

女(之)也(之)也

女(之)也(之)也

十五日滿月のあきる子丹の如く光とまると同月老子孩  
 解<sup>五</sup>とまると一と撰せしより四月五日  
 正信<sup>三</sup>年三月八日徳松君生  
 内身徳屋張重相<sup>義直</sup> 是より撰上せらるる江守<sup>正</sup>  
 伊女<sup>正</sup>の刻<sup>正</sup>の書院<sup>正</sup>

日光伊勢  
倒始

多美<sup>正</sup>の幼<sup>正</sup>又<sup>正</sup>は海井<sup>正</sup>伊勢<sup>正</sup>の依<sup>正</sup>命<sup>正</sup>本<sup>正</sup>勅<sup>正</sup>再<sup>正</sup>密<sup>正</sup>使<sup>正</sup>道<sup>正</sup>春<sup>正</sup>興<sup>正</sup>  
 疾<sup>正</sup>登<sup>正</sup>推<sup>正</sup>於<sup>正</sup>使<sup>正</sup>及<sup>正</sup>並<sup>正</sup>詔<sup>正</sup>問<sup>正</sup>之<sup>正</sup>云<sup>正</sup>と<sup>正</sup>丹<sup>正</sup>者<sup>正</sup>經<sup>正</sup>委<sup>正</sup>左<sup>正</sup>為<sup>正</sup> 勅<sup>正</sup>使<sup>正</sup>登<sup>正</sup>日<sup>正</sup>正<sup>正</sup>  
 有<sup>正</sup>故<sup>正</sup>東<sup>正</sup>照<sup>正</sup>社<sup>正</sup>御<sup>正</sup>宮<sup>正</sup>之<sup>正</sup>宣<sup>正</sup>旨<sup>正</sup>云<sup>正</sup>と<sup>正</sup> 同<sup>正</sup>八月八日<sup>正</sup>の<sup>正</sup>協<sup>正</sup>也<sup>正</sup>  
 以<sup>正</sup>協<sup>正</sup>同<sup>正</sup>古<sup>正</sup>堀<sup>正</sup>田<sup>正</sup>の<sup>正</sup>宣<sup>正</sup>旨<sup>正</sup> 協<sup>正</sup>同<sup>正</sup>古<sup>正</sup>堀<sup>正</sup>田<sup>正</sup> 〇是<sup>正</sup>より<sup>正</sup>山<sup>正</sup>守<sup>正</sup>船<sup>正</sup>  
 賜<sup>正</sup>甲<sup>正</sup>川<sup>正</sup>の<sup>正</sup>宣<sup>正</sup>旨<sup>正</sup>云<sup>正</sup>と<sup>正</sup>宣<sup>正</sup>旨<sup>正</sup>云<sup>正</sup>と<sup>正</sup> 〇同<sup>正</sup>海<sup>正</sup>守<sup>正</sup>川<sup>正</sup>東<sup>正</sup>海<sup>正</sup>  
 有<sup>正</sup>小<sup>正</sup> 〇堀<sup>正</sup>田<sup>正</sup>の<sup>正</sup>宣<sup>正</sup>旨<sup>正</sup>云<sup>正</sup>と<sup>正</sup> 〇是<sup>正</sup>年<sup>正</sup>少<sup>正</sup>少<sup>正</sup>息<sup>正</sup>古<sup>正</sup>を<sup>正</sup>將<sup>正</sup>監<sup>正</sup>  
 少<sup>正</sup>下<sup>正</sup>大<sup>正</sup>綱<sup>正</sup>を<sup>正</sup>東<sup>正</sup>七<sup>正</sup>魚<sup>正</sup>云<sup>正</sup> 上<sup>正</sup>詔<sup>正</sup>あり<sup>正</sup> 〇是<sup>正</sup>年<sup>正</sup>少<sup>正</sup>少<sup>正</sup>息<sup>正</sup>古<sup>正</sup>を<sup>正</sup>將<sup>正</sup>監<sup>正</sup>  
 忠<sup>正</sup>真<sup>正</sup>伊<sup>正</sup>小<sup>正</sup>國<sup>正</sup>之<sup>正</sup>家<sup>正</sup>傳<sup>正</sup>元<sup>正</sup>始<sup>正</sup>の<sup>正</sup>記<sup>正</sup>を<sup>正</sup>記<sup>正</sup>し<sup>正</sup>て<sup>正</sup> 〇是<sup>正</sup>年<sup>正</sup>少<sup>正</sup>少<sup>正</sup>息<sup>正</sup>古<sup>正</sup>を<sup>正</sup>將<sup>正</sup>監<sup>正</sup>  
 同<sup>正</sup>年<sup>正</sup>今<sup>正</sup>年<sup>正</sup>より<sup>正</sup>林<sup>正</sup>家<sup>正</sup>禮<sup>正</sup>の<sup>正</sup>族<sup>正</sup>之<sup>正</sup>毎<sup>正</sup>年<sup>正</sup>伊<sup>正</sup>勢<sup>正</sup>日<sup>正</sup>之<sup>正</sup>宣<sup>正</sup>旨<sup>正</sup> 〇是<sup>正</sup>年<sup>正</sup>外<sup>正</sup>  
 伊<sup>正</sup>勢<sup>正</sup>日<sup>正</sup>之<sup>正</sup>宣<sup>正</sup>旨<sup>正</sup>云<sup>正</sup>と<sup>正</sup> 〇白<sup>正</sup>石<sup>正</sup>の<sup>正</sup>伊<sup>正</sup>勢<sup>正</sup>日<sup>正</sup>之<sup>正</sup>宣<sup>正</sup>旨<sup>正</sup>云<sup>正</sup>と<sup>正</sup> 〇是<sup>正</sup>年<sup>正</sup>外<sup>正</sup>  
 〇堀<sup>正</sup>田<sup>正</sup>の<sup>正</sup>宣<sup>正</sup>旨<sup>正</sup>云<sup>正</sup>と<sup>正</sup> 〇是<sup>正</sup>年<sup>正</sup>外<sup>正</sup>  
 由<sup>正</sup>掬<sup>正</sup>兼<sup>正</sup>以<sup>正</sup>戸<sup>正</sup>を<sup>正</sup>迎<sup>正</sup>へ<sup>正</sup>其<sup>正</sup>の<sup>正</sup>宣<sup>正</sup>旨<sup>正</sup> 〇是<sup>正</sup>年<sup>正</sup>外<sup>正</sup>  
 正信<sup>三</sup>年三月八日徳松君生  
 内身徳屋張重相<sup>義直</sup> 是より撰上せらるる江守<sup>正</sup>  
 伊女<sup>正</sup>の刻<sup>正</sup>の書院<sup>正</sup>





お此の上巻

**慶安**

正保五年 三月廿七日 松平輔中が如多田記を

小母御座氏七月四日

生延喜式卷第廿五在位年 三月廿七日

三洲大船寄小母 是の南の三月廿七日

四月廿七日 將軍の御記も少し時美殿御記を之に

新刊の古本經 市改と記注奉天海信云今令也

○林長祿の三月廿七日也記小書向田年

生のころきと情ふ信ふ東處山小之新子開梅の子と作

る海に海原面の方子有康丞福喜と云々 右鏡子傳

知れ少く 録記の 様小刻むる 是れ其の如也 云云 是時記

刊の前後の目録二部一十四百十二元巻第百二十卷函数

の百六十五寛永十四丁丑三月廿七日始刊之刻

上総の徳島記 作年 **慶安** 二年二月九日録記松山

中 和島 辺 古地 震 域 中 石 垣 郡 民 屋 多 破 損 事 因 五

月十日 川 瀬 出 島 邑 際 事 二 年 二 月 十 日 因 二 月

海井忠常の年 四丁五丁 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

十 七 日 内 務 方 二 年 已 上 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

震 同 二 月 市 六 〇

同 二 年 一 月 市 方 又 是 人 同 二 年 十 月 廿 八 日 又 一 人 宣 文 二 年 一

**火消**

同 二 年 一 月 市 方 又 是 人 同 二 年 十 月 廿 八 日 又 一 人 宣 文 二 年 一

同 二 年 一 月 市 方 又 是 人 同 二 年 十 月 廿 八 日 又 一 人 宣 文 二 年 一

元年十月十日常陸守清盛又十位とあり○是年小倉正房陸奥守の景兼阿蘇院王攻城の法を記し其書概して記す○小倉景兼三年 幕下及内廷の人物は并陣を割り阿蘇院の景法を兵糧の用にあつて授定し終焉乃丹子とありて 在位は少佐に任ぜられ阿蘇院人南東時作を養ひて福島の攻城の法を推回し是を書し傳りて其書とて之を記す○是年西園院東浩水田細大物を季也四年四月十日其元年四月十日同市五日其元年四月十日同市九日日光山入出着格九月十日日光山寺著送同十七日 勅使宣旨使下向勅旨大猷院贈僧正位大相國 △其書所記の景兼の撰政信房公息女之在位は三年二月八日其元年四月十日同市五日其元年四月十日同市九日日光山入出着格九月十日日光山寺著送同十七日 勅使宣旨使下向勅旨大猷院贈僧正位大相國 △其書所記の景兼の撰政信房公息女之在位は三年二月八日其元年四月十日同市五日其元年四月十日同市九日日光山入出着格九月十日日光山寺著送同十七日 勅使宣旨使下向勅旨大猷院贈僧正位大相國 △其書所記の景兼の撰

○宝曆十三年四月十六日贈従一位  
大猷院贈僧正位大相國 △其書所記の景兼の撰政信房公息女之在位は三年二月八日其元年四月十日同市五日其元年四月十日同市九日日光山入出着格九月十日日光山寺著送同十七日 勅使宣旨使下向勅旨大猷院贈僧正位大相國 △其書所記の景兼の撰

嚴有院殿御世 家綱公は其の 大猷院殿の嫡男

利長女○於らくの方治不家陸奥院  
八月廿知上刻沙切丸小内使生 寛永十年  
此初名 行子代君同九月廿初之 傳是也 傳同











を以てありのけ侍家令なる而も揚げて以て求むの辨と  
ありしにめらうと我等後集子息也○同年四月小糸  
為房も西成城制の如きと別れて同年九月  
明明永明王の軍作敵成印使本一の援兵を  
請ふに同年十一月晦日伊賀内 為房上  
同年十二月末藤子余一と諸説十五五志  
字一五早と探出り而も其の後の子書一あり  
万治二年二月十日仲初越中越中と稱する同年二月  
十日 此中を経るに○右角松葉道園石見  
旧記之云々の事内中二内を由りて下格如所子少を揚  
江 伴舟内作る子傳たるを鹿十人 伴舟言十五人  
十石石之四方石之鹿梅合ふ事 伴舟由鹿志之言一舟中  
少許の事は移後西九月三年目此松梅越中移後事  
は藤子内天守也 伴舟之在古事も此松梅越中十石  
いづくも此河内より止す事也 伴舟言其は五と云く○同年

七月十日 江戸右衛門洪水同日右庫之重廿十五  
を以て替作 伴舟悦子獨ふ同年九月五日由是  
出 伴舟は山移後同日其之而雨松梅を移る  
新大橋元徳六年 同年十月十日伊賀内事印信  
伴舟言 万治二年九月連日大雨洪水五日あり  
月十一日大雨 ○古松梅落雷大橋越中に入るに伴舟  
先天下守也松梅倉米多積物 ○同年七月十八日杉平  
陸奥守不利 流之依之通 伴舟同年十月十日梅日  
日定山内室氣子 賤遜入 小判子四五兩其令少平松梅  
元同年十月三日 松梅佐房主也 田止地外 西信  
伴舟言 万治二年八月十日 可願松梅子帯り  
は新越子万石楊万治年中 如所河内 松梅測  
おの場を 松梅五石川也 通 松梅家松梅  
架松梅之石松梅測之めらう ○伴舟松梅子五番松梅  
五治之年十月十日 松梅測河内 松梅五石松梅測之



寛文七年三月卯朔時... 寛文元年... 寛文二年三月三日... 寛文元年... 寛文二年三月三日... 寛文元年... 寛文二年三月三日...

寛文元年... 寛文二年三月三日... 寛文元年... 寛文二年三月三日... 寛文元年... 寛文二年三月三日... 寛文元年... 寛文二年三月三日...



老中傳之因十月朔日編年集布月二  
 務系正則寺社奉行 井上の内書正則の論  
 況玉の寺社奉行にして 井上の内書正則の論  
 四代を以て因市日也乾編年録の序を以て  
 之也乾通鑑と号せらる因十月七日在府  
 の大いん并内口院中の院主私書所持之面之因  
 深一の子及也 深一の子及也  
 現 **寛文** 五年三月二日古物傳行天皇雷火  
 して 寛文五年三月二日古物傳行天皇雷火  
 同七月十日因之 同七月十日因之  
 家樂 上監の掎る不 家樂 上監の掎る不  
 言下致由は受之 言下致由は受之  
 戸へ義向あり 戸へ義向あり  
 作ら 作ら  
 活 活

抄

又山崎中書改む事由是なり 又山崎中書改む事由是なり  
 せら せら  
 多 多  
 年 年  
 呈 呈  
 災 災  
 活 活  
 十 十  
 作 作  
 也 也  
 又 又  
 揚 揚

誣民之類也 可為 抄書 之 卷中 飲<sup>領</sup>して 〇四月十八日

武家抄書 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇

物有 〇

或家 〇

日名 〇

細工 〇

其心 〇

誠家 〇

九度 〇

抄本 〇

不實 〇

早下 〇

二紙 〇

子子 〇

同日 〇

子春 〇

等世 〇

此師 〇

物記 〇

之身 〇

此是 〇

以文 〇

此原 〇

此秋 〇

此類 〇

此本 〇

此土 〇

不怠使... 是神道相傳... 寛文七年七月廿八日吉川惟... 是神道相傳也... 上関... 神道... 廿八日通鑑編纂... 林家... 寛文八年正月自氣西... 朔廿七日... 正月七日... 王國三月...

松前... 同月亦日... 寛文十年二月四日... 新撰... 徳田... 寛文十年二月四日... 新撰... 徳田...

市前通鑑卷序下通會曰年久前芳平仲多退詔卷曰本  
 朝之方部書所如改之太平の政事あり○同十八日  
 林表所如通鑑二百三十卷提要三十卷成切致上  
 同十八日通鑑殘編成之案進呈後計三百十卷  
 同十九日通鑑總編集之役人しあを編下○永井  
 此部王譜林氏の譜系史記鑑定録○編下は日永井尚庸平  
 近秀國治の力老藤子老徳三石石と編下は限五好時徳表  
 著一善東銀五好時徳友元銀百好伯元王徳表ふとあり老  
 多根を編り○同十八日通鑑編集の用史録と  
 之通鑑學案とあり○同十八日通鑑編集の用史録と  
 老是之と通鑑下通鑑學使教育の料として○同十八日通  
 集下用五の時通鑑學使を在付ふ○同十八日通鑑編  
 合せらる○五史知目録亦言年の事詔老列老久和  
 如傳一在序一曰五史知目録を以て通鑑學案且以年別  
 配九十昔月作可如前一書通鑑學使若他後有不用

可以生後調之我等譜圖女子亦言所改國史知一九十昔月作  
 少海之改爲舊生之料しるゆ○同十八日通鑑編集の用史録と  
 浩清忽起弘波瀾先○寛文十年三月廿七日松平  
 隆長守綱村公事之儀酒井雅樂以忠信が  
 先、兼房老中列老吹味○同十八日通鑑編集の用史録と  
 を思理ふは子伊達吉房也一切勢を果田外記傳に記す  
 其甲由事と一戦初親の討つたるに深子原創雅樂須  
 由事下石田信吉の古田伊藤原田と氣之雄雄を記す  
 時子所在り信田山吉等一純平伊藤と吉房子原田と  
 勢中四月二日信田山吉等一純平伊藤と吉房子原田と  
 定之則に記す七松倉岡正正の在言中捕り伊達吉房原田  
 甲斐より多の和原田子原隆一仙臺の佐屋吉房の依之則  
 鎮守松平七信吉一也既嫡子市山小山原吉房の依之則  
 田村隆吉の在言一病身一仍之に在言仙臺の在言一也  
 其甲由捕り随陸奥守と信是せし一也此書之在言一也

師分々○同日四月十日  
 大猷院御市一回出忌之儀  
 日定山之由ありて万部遍經此修り而女代井伊  
 掃部頭直隆登山同七月十日臨球侍登城  
 口禪同八月十九日大風雨徳島月大水東海を布大水  
 出た小橋九千間人畜死  
 同土月播尾伊丹山法師ト花宗路侍の毒草開中  
 前代末國やと云**寛文**十二年八月十七日純伊丹後領創  
 業地考異十冊を撰り○至天の孫の實文十二年八月十日  
 純伊中納言ありて此聖書を書き以創業地考異十冊を撰り  
 と見之又純廣田記は八月十日南禪院御市人を記すま  
 公方候に在る能成治上と成り候に思ふに  
 公方候に在る能成治上と成り候に思ふに  
 公方候に在る能成治上と成り候に思ふに  
 公方候に在る能成治上と成り候に思ふに  
 公方候に在る能成治上と成り候に思ふに  
**延宝**元年九月廿  
 九月八日妙吉祥院ニ 柳利堂上高倉小聖元院之傍也院  
 明正院隣西院あり  
 同十二月六日二九ふ院之東在る庭内也田小納言殿



的 上覽同日七日召之黄令を賜り是迄之を以年一  
 南蛮イキリスノ人長崎子入儀之交易と名能成治上免  
 許す**延宝**二年二月廿六日夜中一文斗あり不  
 星雲東南より西子柳川室中柳川大水  
 四月廿方内洪多  
 之系也柳川是是年長崎入津の唐  
 人福至長之桂路逢と云す也○是之桂路明の長將  
 清小隆系ノ宅屬と云す也○是之桂路明の長將  
 の皇子を帝位子即ヶ清和を成し明也再興也と云す也  
 氣利ありて神と云す也○是之桂路明の長將  
 之と云す也○は身が法多し和来也と云す也  
**延宝**三年天下大飢饉○是年春陽三月廿五日  
 少殿松原四糸河原ありて粥乃ち施りあり○同日十月廿五日  
 佐藤の白子長也院中明正院  
 也堂上是時禁許あり  
 信列あり同十月八日金澤  
 寺七日桂子裡新廟ありして神禱院同十月八日金澤  
 海前守正經之文正之編集之二程法教録之子傳

少保玉梅階孫並舍降見七純同神社志古本歌  
正文遺言不依七歌上之○今降世稱按古降異人碑文字  
使時史讀和撰曆代之層一察法記之儀一掃與元之記考諸地定  
實諸敗義編之二程以嘉孫不富之志焉作風七就望如回境正  
神社為之志云云  
**延宝**四年七月四日昔大風雨東海  
道清水同八月廿九日 御倉御前豐仲 傳傳 同十二月廿六日  
法皇御前 女院御前 法皇御前 法皇御前 女院御前 女院御前  
五年四月新嘗祭 延佛同十月廿九日 夜常呂水色  
真以長尾輝方津浪 延佛同十月廿九日 夜常呂水色  
中占定物云々也西小玉嘉利云 稱初多禮○同十二月十二日  
古久保加賀守 忠朝領念占一牙兩段の生小龜を就  
同十二月廿九日 稱多中 丹座元龜 稱海正統百川  
字海三寸圖繪を述我々云々云々 同十二月廿九日  
五日 稱多中 出幸也云々云々 同十二月廿九日  
八十冊正百川 字海二十四冊統百川 字海二十四冊慶百川 字海

二十四冊二月圖繪卒冊云々云々云々○又吉良家日記七是日  
**延宝**六年六月十日 女院御前所願所  
同七月十八日 伊豫七依堂守方 風雨清水同九月十四日  
小十右衛門 清水放生會 同十月廿三日  
小豆原丹三直經家流の書物五十九冊十二卷也 同十二月廿九日  
○下等兼村法云云二十冊同軸物六卷該院法云云廿冊同軸物三  
卷尾馬弟 子綱の云十冊同軸物三卷 **延宝**七年二月廿九日  
而社河左社貴布社社河左社遺書又同八月廿九日 東  
照子少孫地同傳子國之書云々 同八月廿九日  
日海子八月廿九日 同八月廿九日  
少孫地同傳子國之書云々 同八月廿九日  
補副是冊一代要地十冊授葉拾葉集三十六冊也  
對七らる○海上院日記子載不若山文集 延寶八年二月廿九日





寛文二年十二月十八日山前殿文を執せらるる 寛文

三年五月廿一日山前殿内侍所殿に東御所林上初等内

入給 寛文四年九月十八日山前殿 延宝五年四月十

五日山前殿御内侍生〇山前殿御内侍九郎地田持監正元女元文之等

六月九日御膳所御内侍院殿七等信上生〇九年七月十八日御伊

中御云御教山前中宮承元年四月十日御膳所御内侍院殿及御

増考山前御膳所 延宝七年五月十日御膳所御内侍生〇山前

三ノ丸及天和三年壬戌九月八日御膳所御内侍院殿及御増考山前御

岳神社 延宝八年五月六日 山前御内侍院殿御内侍御

大御所御内侍院殿 御内侍二九ノ山前御内侍院殿御内侍御

山前御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿

御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿御内侍院殿



近江守中津  
乙未の事  
○西光  
素明  
大正  
長吉  
長吉  
長吉  
長吉  
長吉  
長吉

○是時河津名瀬子二子依古事既千依山景瑞事以七子依  
日与以子依山景瑞事既其依日与以七子依山景瑞事以日  
五人依山景瑞事既其依日与以七子依山景瑞事以日  
河津名瀬子二子依古事既千依山景瑞事以七子依  
二子依山景瑞事既其依日与以七子依山景瑞事以日  
依山景瑞事既其依日与以七子依山景瑞事以日  
五の元言布衣已下四方依山景瑞事既其依日与以七子依  
河津名瀬子二子依古事既千依山景瑞事以七子依  
既日與一富吉之為依山景瑞事既其依日与以七子依  
之とるり○同有古事朝辭の御使中城山景瑞事以日  
五日御田子瑞子依古事朝辭の御使中城山景瑞事以日  
同有古事朝辭の御使中城山景瑞事以日  
○古事朝辭の御使中城山景瑞事以日  
既日與一富吉之為依山景瑞事既其依日与以七子依  
之とるり○同有古事朝辭の御使中城山景瑞事以日  
五日御田子瑞子依古事朝辭の御使中城山景瑞事以日  
同有古事朝辭の御使中城山景瑞事以日

○是時河津名瀬子二子依古事既千依山景瑞事以七子依  
日与以子依山景瑞事既其依日与以七子依山景瑞事以日  
五人依山景瑞事既其依日与以七子依山景瑞事以日  
河津名瀬子二子依古事既千依山景瑞事以七子依  
二子依山景瑞事既其依日与以七子依山景瑞事以日  
依山景瑞事既其依日与以七子依山景瑞事以日  
五の元言布衣已下四方依山景瑞事既其依日与以七子依  
河津名瀬子二子依古事既千依山景瑞事以七子依  
既日與一富吉之為依山景瑞事既其依日与以七子依  
之とるり○同有古事朝辭の御使中城山景瑞事以日  
五日御田子瑞子依古事朝辭の御使中城山景瑞事以日  
同有古事朝辭の御使中城山景瑞事以日  
○古事朝辭の御使中城山景瑞事以日  
既日與一富吉之為依山景瑞事既其依日与以七子依  
之とるり○同有古事朝辭の御使中城山景瑞事以日  
五日御田子瑞子依古事朝辭の御使中城山景瑞事以日  
同有古事朝辭の御使中城山景瑞事以日

○天和三年正月朔日  
河津大和  
河津大和  
河津大和  
河津大和  
河津大和





此忌不信て東麓山にて法隆寺法苑一万余部あり

至同九月云徳大成地三十卷標本林甚多常是を

第〇信子信子阿中書陽書云云七ノ一林甚多今之有之本

中書子之阿記法隆寺傳系圖を右考一編集正とす〇

同十月十日法隆寺書を編む 〇同十月十日法隆寺書を編む

法隆寺人本書田土のあり銀子二百八人而書十人信

法書入文 作付 貞享四年二月十一日書卷を以て弘文

院學士の字を以て號し一〇同三月十日 靈恩院禪位

正徳三年八月十日 同十月十日法隆寺書を編む 〇同十月十日法隆寺書を編む

此時あるは信子阿中書陽書云云七ノ一林甚多今之有之本

臣苗字を以て號し一〇同四月十日東山院即

位子信子朝仁 同十月十日法隆寺書を編む 〇同十月十日法隆寺書を編む

上納不<sub>レ</sub>は信子 原出の市儀を以て信子の信子信子信子

の刻 〇同十月十日法隆寺書を編む 〇同十月十日法隆寺書を編む

右卷平年表為之冊以藏書

長樂孫郎平信近

細

此卷  
之如

此卷  
之如

此卷  
之如

此卷  
之如

此卷  
之如



山内三平五郎  
長子孫作孫次郎

四十一号二月廿日  
山内三平五郎  
長子孫作孫次郎

山内三平五郎  
長子孫作孫次郎



Handwritten header or title at the top of the page.

First section of handwritten text, consisting of approximately seven lines of cursive script.

Second section of handwritten text, consisting of approximately seven lines of cursive script.